

2019/08/04

## 「土台はキリスト」

### ■人間とはどのような構造になっているのか

「初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。この方は、初めに神とともにおられた。すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもない。」(ヨハネ 1:1-3)

この御言葉からわかることは、神は、粘土細工のように人を造ったわけではないということです。神は、ご自分と離れたものとして人を造ったのではなく、ご自分を土台にし、ご自分と一つに生きるように、人を造ったのです。つまり、私たち一人一人の中に神がおられるのです。

「神が私たちの中におられる」という事実は、哲学では解けなかった謎を解きました。「どのようにして人は物事を認識できるのか」という疑問に対して、哲学は「人間の中に何かを求める普遍的な運動があるから」という結論を導き出しました。例えば、食べものを認識できるのは、食べものがあるからではなく、自分の中に「おなかがすく」という運動が起きるからです。同様に、私たちが何かを認識できるのは、私たちの中に何かを求める普遍的な運動があるからだということです。そして、神が私たちの中におられるということによって、その普遍的運動とは、神を求める運動であると考えられるのです。

私たちの土台が神であり、私たち一人一人の中に神がおられるということを知ることで、人はそれぞれが素晴らしい者であり、それぞれの考え方、生き方を受け入れ合うべきだという考え方が生まれました。もし神がそれぞれを個別に造ったのであれば、神は人を造るにあたって何らかの理想形があり、この理想形に沿った生き方こそが正しい生き方ということになります。すると、教育とは人を型に合わせることであり、型に合わない者はダメなものだということになってしまいます。

### ■私たちの土台は神である

「それは、父よ、あなたがわたしにおられ、わたしがあなたにるように、彼らがみな一つとなるためです。また、彼らもわたしたちにおるようになるためです。」

(ヨハネ 17:21)

「そして、わたしは彼らにあなたの御名を知らせました。また、これからも知らせます。それは、あなたがわたしを愛してくださったその愛が彼らの中にあり、またわたしが彼らの中にいるためです。」(ヨハネ 17:26)

三位一体の神は、互いをそれぞれ必要とする存在であり、互いが互いの中であって生きておられます。キリストが父なる神と一つであるように、人間も私と一つであるとイエス様は言っておられます。私たちの中にキリストがおられることを、パウロは次のように説明しています。

「私たちはキリストのからだの部分だからです。」(エペソ 5:30)

神は人を造る時、土で体を形造り、いのちの息を吹き込みました(創世記 2:7)。「いのちの息」は、三位一体の神のいのちを表し、「魂」とも訳されます。私たちの魂が、神のいのちで造られているということは、私たちにはイエス・キリストという土台が据えられていて、神と一緒に生きるように造られたということです。

「というのは、だれも、すでに据えられている土台のほかに、ほかの物を据えることはできないからです。その土台とはイエス・キリストです。」(I コリント 3:11)

「初めに言葉があった」ということは、初めにキリストという土台があり、人はキリストと一つの存在としてその上に建てられているということです。

にもかかわらず、今、人間が神と一つに生きることができなくなっているのは、死が入り込んだことによるものです。死とは、神との結びつきを失うことです。

たとえて言うならば、神と私たちは、神の国という一つの国だったものの、そこに隔ての壁ができてしまった状態です。この隔ての壁が死です。

体にたとえると、血管が詰まってしまった先にある器官は壊死するのと同じように、私たちは生まれながらに壊死する状態にあるということです。これを有限性になると言います。有限性のものは有限性のものしか認識できないため、永遠性である神を認識できなくなってしまいました。これが私たちの現状です。その結果、私たちは、神と一つに生きるように造られているにもかかわらず、神の存在が見えないために、神を無視して、自分の存在がすべてだと錯覚するようになったのです。

その錯覚から目覚めて、神が私を造ったと知り、信じるようになった人がクリスチャンです。私たちはイエスが救い主だと知り、隔ての壁が壊れ、血管がもとに戻りました。しかし、いまだに肉体は有限性のものしか認識できません。そのために、クリスチャンになっても神が土台だということがわからず、常に神が外にいるのだと思っています。そして、自分の願望を満たすために神にお願いする関係が当たり前だと思っているクリスチャンが大勢います。しかし、それは間違いです。神が私たちの土台であり、私たちは神と共に生きるものなのです。

## ■神が土台であることから見えてくる風景

### 1. 土台に合わない建物は建てられない

私たちの土台であるイエス・キリストは永遠です。つまり、その土台の上には、永遠なるものしか建てることのできないのです。

あなたは自分の人生で何を建てあげようとしているのでしょうか。一番をめざし、誰もが人から評価されることを目指して生きていますが、それは永遠ではありません。それを目標として手にしたところで、すべて消えてしまいます。

「もし、だれかがこの土台の上に、金、銀、宝石、木、草、わらなどで建てるなら、各人の働きは明瞭になります。その日がそれを明らかにするのです。というのは、その日は火とともに現われ、この火がその力で各人の働きの真価をためすからです。もしだれかの建てた建物が残れば、その人は報いを受けます。もしだれかの建てた建物が焼ければ、その人は損害を受けますが、自分自身は、火の中をくぐるようにして助かります。」（I コリント 3:12-15）

肉体の死が訪れる時、どんなに苦勞して手に入れたものであっても、この地上で手にしたものはすべて消えてしまいますが、土台であるイエス・キリストだけは残ります。聖書は、いつまでも残るものは、信仰、希望、愛だと教えています。つまり、イエス・キリストという土台に合うものしか残らないということです。神を愛し人を愛する心、信仰、希望、愛しか残らないのです。

あなたは、それを人生の中心に置いているのでしょうか。残らないもの、消えてしまうものを宝として、一喜一憂する人生で良いのでしょうか。

### 2. 何者かになる必要はない

人は、「〇〇のようになりたい」と願い、何かを目指して、それが実現すれば幸せになれると思って生きています。それは、裏を返せば、今の自分はキライだということです。しかし、神のいのちの土台を持っているということは、私たち自身はそれだけで完全であり、素晴らしい存在として造られているということなのです。私たちはそれぞれキリストのからだの器官として完結している素晴らしいものであり、他の何ものかになる必要はないのです。

土台がキリストでなければ、人間には何の価値もありません。土台に気づいていない人は、自分で価値を見出そうと、人と比較し、少しでも人から良く思われようとして生きています。もし神が私たちを、ご自分とは関係なく造ったのであれば比較もできるでしょうが、私たちは皆イエス様と一つなので、比較することはできません。人間が一つであることを示す例のひとつが、愛他行動と呼ばれる、とっさのときに、自分の命を顧みないで人を助けようとする行動です。見ず知らずの人であっても助けようとしてしまうのは、皆が同じ命を共有しているからです。私たちの中に神のいのちがあって、人とつながっているために、人を助けて

しまうのです。

「今、私たちは鏡にぼんやり映るものを見ていますが、その時には顔と顔とを合わせて見ることになります。今、私は一部分しか知りませんが、その時には、私が完全に知られているのと同じように、私も完全に知ることになります。こういうわけで、いつまでも残るものは信仰と希望と愛です。その中で一番すぐれているのは愛です。」  
(I コリント 13:12-13)

私たちはこの世界で、神という土台が見えず、ぼんやりと鏡に映るような自分を見ています。有限性の世界では、永遠性の神を見ることができないので、自分の素晴らしさを見ることも出来ないのです。有限性の死の世界で、そのおぼろげな姿を見ていると自分はダメなものとしか思えません。しかし、私たちも天国に行ったら、覆いが取り除かれて、自分は良きものであり素晴らしい者であることを完全に知ることができるようになります。人間の悲劇は自分を嫌って何者かになろうとすることです。しかし、イエス・キリストが土台だということに気づけば、何者かになろうとする必要はないのです。

### 3. 自分が無になれば、残るのはイエス・キリストだけ

残念なことに、人は御心に従って生きようとするよりも、自分の思いを優先させて生きようとするものです。私たちは神と一つであるにも関わらず、神を無視して生きようとしてしまうのです。

しかし、自分が無になれば、神だけが残ります。つまり、自分の欲望を捨てれば、神と一つになることができます。私たちが幸せになる唯一の道は、キリストと一つになって生きる道しかありません。

「私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。」(ガラテヤ 2:20)

私たちが主役なのではなく、イエス様が主役であることに気づくと、なんとしても自分の願いをかなえてもらいたいという欲望は消え、「あなたの御心がなりますように」と祈るようになります。自分の本当の幸せは、神と共に生きることであり、神の御心になることだと知るので。

私の土台はキリストであり、私の中に生きているのは、私ではなくキリストだったと気づくなら、自分の幸せは自分が無になることだと悟るので。

### 4. 神がいつでも支えてくださっている

「彼らが苦しむときには、いつも主も苦しみ、ご自身の使いが彼らを救った。その愛とあわれみによって主は彼らを贖い、昔からずっと、彼らを背負い、抱いて来られた。」(イザヤ 63:9)

キリストが土台であるということは、神が私たちを背負っておられるということです。ですから、誰も私たちを神の愛から引き離すことはできません。

「私たちをキリストの愛から引き離すのはだれですか。患難ですか、苦しみですか、迫害ですか、飢えですか、裸ですか、危険ですか、剣ですか。私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。」(ローマ 8:35-39)

建物が土台から動くことができないように、私たちは土台であるキリストから絶対に離れることはできないのです。ですから、一度救われて神との関係を回復した人は、必ず天国に行くことができます。イエス・キリストは、「私を信じる者は永遠のいのちを持っている」と言われました。「永遠のいのち」とは、イエス・キリストを指す言葉です。私たちは、イエス・キリストを持っているのです。ですから、イエス様のことを「インマヌエル(神は私たちと共におられる)」と呼ぶのです。私たちの人生は神と共にしか生きられないのです。

「私たちは、神の中に生き、動き、また存在しているのです。」(使徒 17:28)

あなたは、神と別々に生きているのではなく、神と共に生きているのであり、神があなたを生かしているのです。神を無視して生きることなどできないのですから、神と離れて生きることはあきらめましょう。いつそれをあきらめるか、それは多くのクリスチャンにとっての課題です。本当にこのことに気づき、あきらめることができれば、「御心がなりますように」と祈るようになり、どんなことでも神に助けを求め、隠し事をすることなく何でも神に祈るようになります。そして、自分の犯した罪を祈ることで、さらに神の愛が見えるようになっていきます。

私たちは、すべてを神にゆだねるしかないのです。明日のことを心配するのはやめましょう。神があなたを助けます。

「土台はイエス・キリストである」これが人の構造です。「初めに言葉があった」とは、初めにキリストという土台があり、私たちはその上に建てられたということです。この事実の深さ、素晴らしさを知り、すべてを神にゆだねる道を選びましょう。